

Save The Tropical Forests

ウータン

Hutan

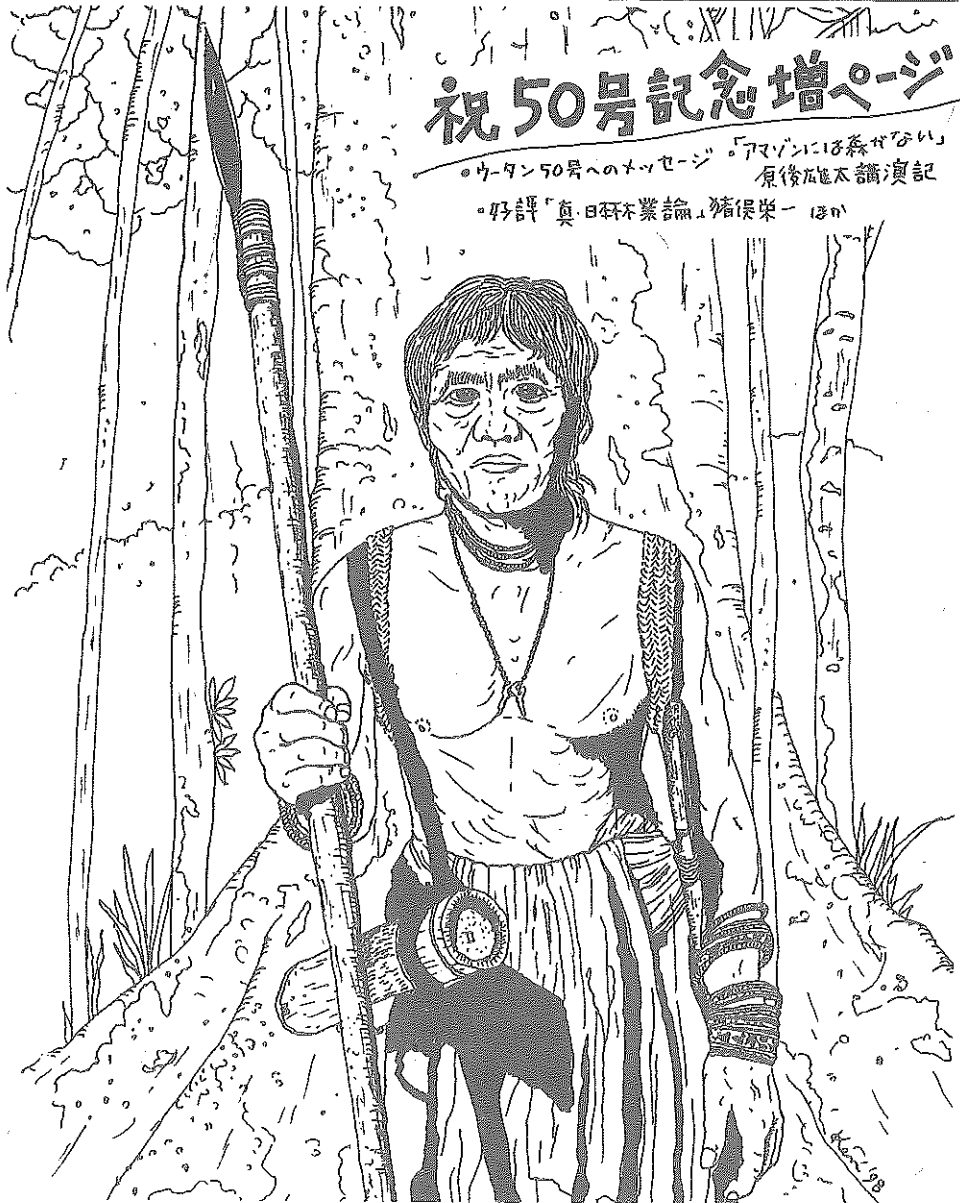
50

森の通信

1998.12.22

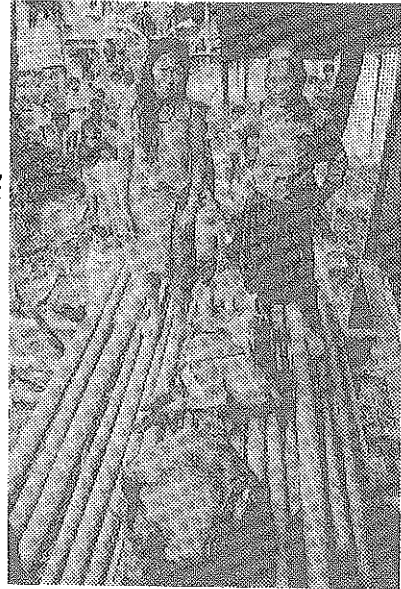
祝50号記念増ページ

・ウータン50号へのメッセージ「アマゾンには森がない」
原後加太講演記
・好評「真・日本林業論」猪俣栄一 ほか



◆今号は50号記念増ページです!

- 3…………「ウータン50号へのメッセージ」大田伊久雄、
大西裕子、峠隆一、JATAN、S.C.C、地球
の友、PHD協会、にっぽんこどものじゅんぐる他
- 10…………10.25集会「アマゾンには森がない」講演
原後雄太
- 14…………「森林・女の吸収源のその後」
JATAN・小倉正
- 16…………猪俣栄一「真・日本林業論」
その③
- 20…………ウータンニュース
- 21…………サラワク州「バクンダム社論文」
- 22…………会計より、'98年会計報告
- 23…………ウータンバックナンバー紹介



4 シカの獲物を前にするフアン人の女性

ウータン活動報告

'98.9月~12月

- 98・9・26-27 エコ・フェスタに参加/万博公園で/永田、川本、荒木等
- 10・3 「NGOが開く未来」へ参加/篠宮、西岡、荒木
- 10・7 Ene関西(地球環境NGOネットワーク関西)学習会に参加
/西岡:『MAI(多数国間投資協定)は環境破壊』
- 10・20 10月熱帯林イベント最終打合せ会議
- 10・25 世界熱帯林週間イベント「森を守るあなたの智慧」
講演:JBN代表・原後雄太さん「アマゾンには森がない」
主催:ウータン、熱帯林きょうと、奈良熱帯林行動ネ
ットワーク他/3つの分科会で討論・意見交換
- 11・3 Ene関西総会に参加/西岡、牛田/運営委員へ
話:気候ネットワーク代表浅岡さん「COP4と日本の課題」
- 11・27 豪州アポリジニの地・森「カカドウ守れ」の京都街頭行動
に参加/牛田
- 12・6 「世界遺産カカドウを放射能で汚すな」大阪集会に参加
/牛田
- 12・6 COP3一周年「市民が進める温暖化防止」京都会議
第5分科会の「森林破壊・紙・ごみ問題」セッションを、
ウータン、JATAN、熱帯林きょうと等有志で催す

◎この冊子は再生紙を使用しています。

【表紙】新草木染(古紙40%)

【中紙】バガス(55kg、非木材紙50%、古紙35%)

※表紙イラストはサラワクキャンペーン委員会発行の
「熱帯林を生きる」卓越した狩人たちをもとに
描いたものです。(サラワク州・フアン人)

ウータン50号へのメッセージ

通信『ウータン』は今号で50号となります。

地球の半分の熱帯林が消失し、森林伐採が依然として続いており、2000年を迎え今後、熱帯林保護や森林保護、環境保全をどうするかが問われる時になると思います。事務局で話し合い、今後のあり方について、関係の皆さんのご意見を伺いました。

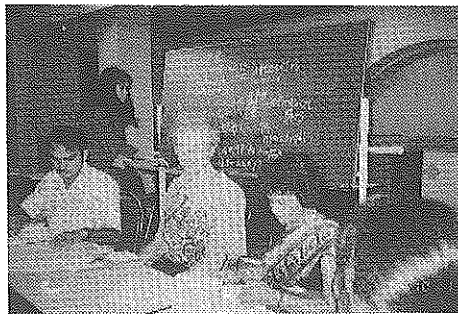
あなたのご意見・お考え

- ①名前(団体名の代表者名) 連絡先
- ②ウータンとの関わり
- ③貴団体の主な取り組みなどのPR
- ④貴方(貴団体)は、今後の熱帯林・森林保護や環境保全をどうすべきか、またどのように取り組むか。—提案、アドバイス、考え方、行動等—
- ⑤ウータンに対するご意見・注文

①大田伊久雄さん(京大大学院農学研究科教官)

- ②けっこう古くからのつきあいになります
が、ほとんどお役に立てていない会員。
- ③北米・欧州・日本の森林管理問題と環境政策などについて研究しています。国有林問題や木材貿易についても興味を持っています。
- ④森林に許容伐採量があるように、地球にも人類をはじめとする生物を持続的に生存させ得る許容範囲があります。これを超えてしまえば環境への負荷が不可逆的に増加し、豊かなあるいは普通の生活を続けることができなくなります。

現在の熱帯林をはじめとする森林環境問題はその一つの兆候であり、大量のエネルギー消費に支えられた我々の生活の見直しが必要です。CO₂削減政策の推進は地球温暖化防止だけでなく森林保護にも重要といえます。別の角度から見ると、南北間の経済格差もしくは貧困の問題が集約的に生活・生存環境の破壊となって現われているのが熱帯林問題ともいえましょう。格差の是正は実質的にはやはり、



先進国の生活の見直しということになります。

- ⑤自治体キャンペーンは素晴らしい企画であり成果であったと思います。こうした地道な活動を続けていってください。

① 大西裕子さん(弁護士)

② どこかの会合で西岡さんと会ったのがきっかけと思うが、あまり昔のことではつきりしない。

③ 1989年に日本弁護士連合会の調査団として京都の寺田武彦弁護士、横浜の林良二弁護士らと初めてサラワクへ。

現地ですでに1ヶ月以上も滞在している日本人がいたのにびっくり。それがTさんでした。

④ 生物多様性条約や地球温暖化防止条約の実行性のなさを見るにつけ、工業国だけではなく、途上国を巻き込んだ政策の展開は雲の彼方であって、そこには永遠にたどり着けないのではないかと考え込んでしまいます。モグラたたきのように、出てくる問題を対処療法的にではなく、抜本的に解決する方法を何とか探したいというのは、所詮叶わぬ夢か...

① 峠一さん(環境問題フリーライター)

② サラワクの森の中で、ウータンのメンバーの大西弁護士に会ったからや! 次の年にサラワク先住民が来日した時、西岡さんらに会ったのがドドメヤ!

③ サラワクへ行くこと15回。延べ1年、森の中で先住民のおっちゃんや子どもたちと一緒に暮らしてまいりました。

④ 本、出しています。「9つの森の教え」。サラワクに関しての原稿書き、講演、スタディ・ツアーも。

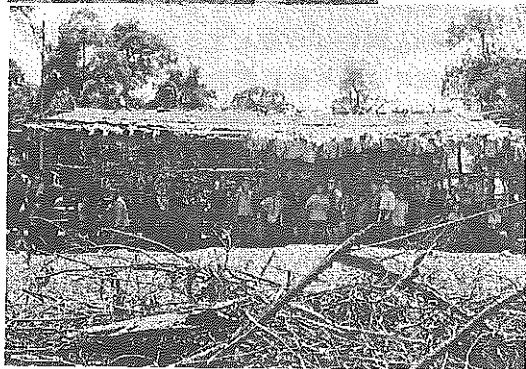
⑤ 熱帯林問題も突き詰めていけば、国内森林問題にぶち当たります。熱帯林、熱帯林と熱くなる前に足元の森を守りましょう、活用しましょう。そのためには、都会の人間でも入っていけるような森作り、森遊び、炭焼き、国産材の利用などやりたいですね。ただ熱帯林問題を知るため



大西裕子弁護士



プロット中になくなった赤ん坊とその母親の墓の前に立たずぬ祖母と姉(アナン)



93年夏 サラワク・アナンによるプロット中

には、現地を知ることも大切。やり方を間違えればただの観光になることには注意すべきですが、スタディ・ツアーは現地の人と知り合えることで元気の源になります。ま、いろいろと諦めないでやっていきましょう。

①熱帯林行動ネットワーク (JATAN) / 事務局長・黒田洋一 ☎03-3770-6308

東京都渋谷区鶯谷町6-5 恵ビル1F

- ②大昔。(ウータンより・JATANの87年サラワク先住民弾圧反対署名協力から)
- ③JATANは、87年設立の、熱帯林破壊に係わる問題を扱う団体です。キャンペーン、政策提言、ロビー活動も行っていきます。
- ④日本が関わりのある個別の森林問題への対応(インドネシア、カナダ、オーストラリア、チリ、ブラジル等)と、森林に関わる国際条約交渉(生物多様性条約、〔仮〕森林条約提案、温暖化防止)など
- ⑤温暖化対策の算定方式の取扱いの国際交渉を通して、実質的な関税機能を果たすような仕組みを作ることが出来、木材貿易の縮小につなげられるのではないかと思います。(記・小倉正)



◀皆伐されるカナダの森林 (ウエスタン・ブリティッシュ)



◀JATAN 小倉正さん

①大阪ごみを考える会 / 代表・中院彰子

☎0720-55-3414 枚方市南楠葉1-61-4

- ②覚えてないんです。JATANを知り、それからウータンを知り、「変わった名前だな」と印象に残り続けましたが。
 - ③ごみ問題の市民講座をきっかけにできた。ごみに関し種々雑多な人が集まっている。本音丸出し、融通性あり。時に奇想天外。
 - ④定例学習会、ごみに関する法律への取り組み、食品残渣リサイクル活動、事業系一般廃棄物について調査、啓発、提案等
 - ⑤ごみ問題は飽食社会の病理であり、その裏に飢餓や貧困の問題があるから、南北問題でもあると思っています。だから熱帯林を守り、そこで暮らす人々と生き物を支援することと同じ本質を持つと思っています。
- しかし...「身近なところから」と活動してきたが、個人や社会のライフ・スタイル



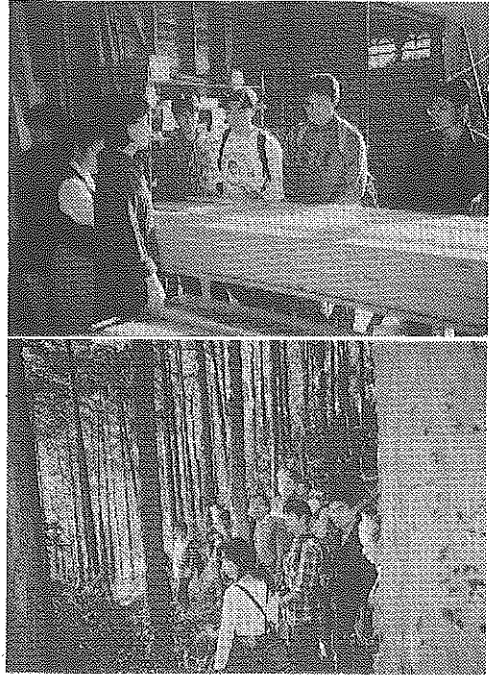
◀中院彰子さん

ルはなかなか変わらない上に、WTOやMAIなどでますます「金」が幅をきかす社会へと動いています。今までより積極的にこのような視点で人に伝えていくことが自分にとって必要と思っています。それから、国内の農林業の状況を知らせることと、参加体験し、体で問題を感じる場を作っていくことが、お尻に火のついた課題だと思われるのですが...

① サラワク・キャンペーン委員会 / 事務局 長・浦本三穂子 ☎03-3954-3510

東京都豊島区目白3-17-24 目白ビル2F

- ② 貴重なパートナー(ウータンより・大変ありがとう)
- ③ サラワクでの熱帯林破壊と先住民族の人権侵害について、日本の市民に伝え、その責任を問う。
- ④ サラワクに関しては伐採のみでなく、ダムやプランテーション問題、森林に関しては木材認証、貿易問題等が生じてきて、最近の周辺事情はますます複雑になってきた。
優先度をつけたり、他団体と役割を分担したりして、効率良く動きたい。
- ⑤ いつも元気なウータンから、私たちもエネルギーをもらっている気がします。

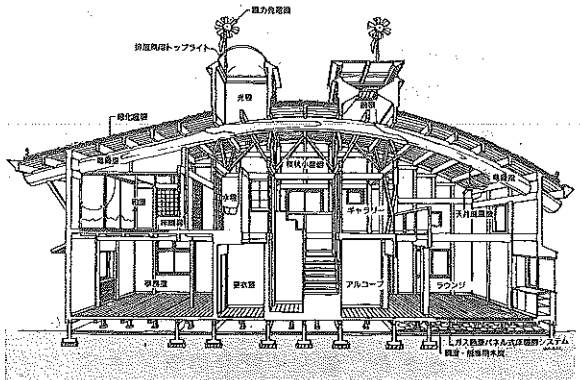
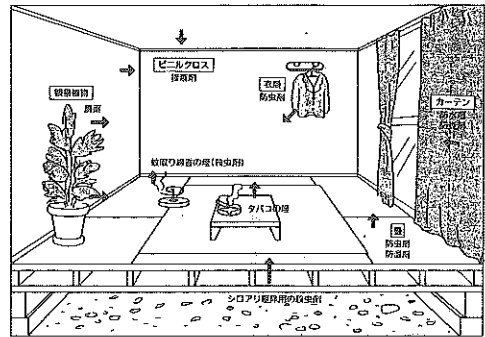


▲SICCの活動のひとつ(国内森林の見学)

① 自然住宅・住まい方推進ネットワーク / 代表・田久保美重子 ☎030-216-4877

埼玉県所沢市上新井11185-5 新所沢スカイハイツ1004 安暖邸建築研究所

- ② 97年サラワク・キャンペーン委員会の集会以て西岡さんとウータンを知った。その後、当ネットワークで色々協力頂いています。
- ③ 自然と共生の精神に基づき、地球環境並びに資源循環を考え、私たちの健康を守る、真に快適な住まいと住まい方を推進することを目的とした活動を行っています。
- ④ 建築は、熱帯林や森林破壊をはじめ建築廃材でのダイオキシンを含む環境汚染等々実に多くの問題をだしているものです。自然をはじめ地球環境を守り、保全するために、私達は自然住宅の普及に、あらゆる角度から取り組んでいきます。
- ⑤ 環境問題は現代において複合的な問題です。
あらゆる分野でのネットワーク化を計り、市民活動の輪を拡げられたらと思います。



①パプア・ニューギニアとソロモン諸島の森を守る会 / 代表・辻垣正彦

☎03-3492-4245 東京都品川区西五反田8-10-14 イトーピア五反田205

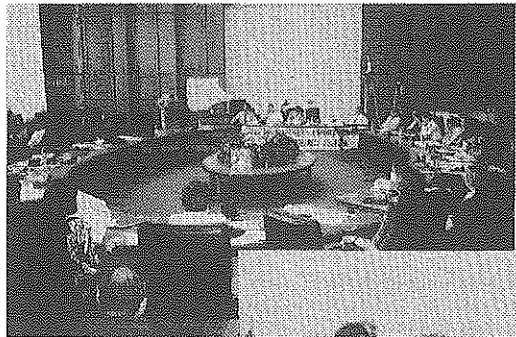
- ②関西のウータンは、西岡一家といわれるように、ネバリと味付けの濃さで有名。同じ森を守るという気持ちが、芯を同じくして、創立以来のお付き合い。サラワク・キャンペーン委員会と一緒に全国会議を催すなど、兄弟のような関係。
- ③93年夏、初めてパプアに10名が訪れ、素晴らしい体験をしました。そこで、パプアニューギニアとソロモン諸島を守る会をつくることにしました。
- 1)パプアやソロモンの森の情報収集
 - 2)私たちが知ったこと等の情報をPR
 - 3)森についての学習会や守る集いの開催
 - 4)木材会社、公的機関等からの情報収集と、要望の伝達
 - 5)パプア干ばつ・飢饉・津波キャンペーン
 - 6)国内の森を守るためのネットワーク化
 - 7)現地への極め細かい調査ツアー など
- ④パプアは、昨年干ばつ等で70万人が死



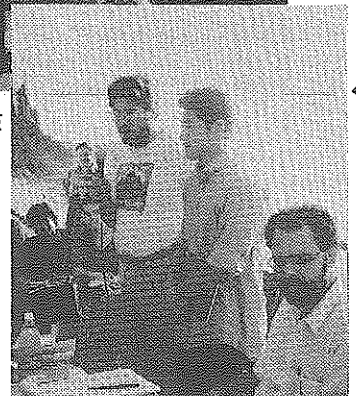
の危機に直面した。それだけではない。「日本がこの国を丸裸にしたからです。30年にわたり輸出木材は6割を日本が占める」と、シスター清水さんが言う。私たちに責任がある。国産材を使わず自らの山林もないがしろにしている暮しを顧みることだ。(長文で略します)

①地球の友ジャパン / 代表・亀井ナラミ ☎03-3951-1081 東京都豊島区目白3-17-24, 2F

- ②97年スタッフがウータン学習会の講師に(実は発足頃?よりナラミさんとは旧知)
- ③ロシアを舞台に日本、アメリカ、ロシア出身のスタッフからなる多国籍チームでタイガ林保護活動を展開中。重要森林地帯の保護措置など
- ④日本の木材需要構造の変化を見越して、今後は熱帯林の開発動向と併せてカナダ、ロシアの北方林の開発に目を向けること、針葉樹外材の産地で生じている環境や先住民族の問題に目を向けることが大切と思います。取りあえず当団体が目指すのは、日本の業界で通用している「ロシア木材は無限だ」という常識が過去のものであることを明らかにすることです。



▲'98年6月に地球の友が実施した森林保護会議の様子。



▲写真まん中が野口さん

(記・野口栄一郎)

① 国産材住宅推進協会 / 北山康子 ☎06-395-3332 大阪市淀川区宮原3-3-11-202

- ② 森林保護の考えが一致して
- ③ 14年にわたるセミナーを通じて、国産材の活用、PR、産地視察、植樹ツアー、森のコンサートなどさまざまなイベントを催し、啓蒙。
- ④ 金儲け主義の行き過ぎ（誰でも金は欲しいが...）で、市民意識があまりに薄いと、自分さえよければという考え方（自分が一番大事なのは分かるが...）
- ⑤ 一緒に、粘り強く、多くの人にPRしましょう。「知ってもらう→理解してもらう→行動してもらう」ことが基本だと考えます。



▲ 宮崎植樹ツアー

① (財)PHD協会 / 理事長・今井鎮雄 ☎078-351-4892 神戸市元町通5-4-3-202

- ② 91年より林業体験合宿「枝打」をウータンの協力を得て開催しています。また、パプア・ニューギニア、ソロモン諸島など南太平洋地域からの研修生に対して、国内で見学の案内をお願いしました。また、ウータンのセミナーに研修生が招かれたこともあります。
- ③ アジア・南太平洋地域から草の根の青年を研修生として日本に招き、一年に亘り、農業、保健衛生、洋裁などの研修を行っています。
- ④ 私たち「北」の国に暮らす人間の「大量消費型」生活のあり方が、一番の問題であると思います。それを見直していくように、農業と食料の安全性との関係や、森林資源と紙製品の消費問題など、私たちの普段からの暮らしから「南」の国との関係を考えてもらうことを呼びかけていきたいと思っています。
- ⑤ 今後も日本の中で、森林資源保護の観点から自分たちの生活をふりかえることを一緒に訴えていきたいと思っています。



▲ 丹波大山での「枝打ち族」

(記・総主事代行/藤野達也)

① につぼんこどものじゃんぐる / 代表・福永一美 ☎0268-74-2729

須坂市峰の原高原ペンションふくなが

- ② 私はウータンとは出会ってな〜い。ウータンに出会ったのは一美さんじゃ。私が出会ったのも一美さんじゃ。
- ③ どこかの大人達が仗っている団体を、勝手に守ろうとしている大人達が、子ども達も巻き込もうとしている団体。
- ④ コスタリカ共和国、タイ王国の熱帯林保護団体の支援と人的交流、国産針葉樹材利用促進グループとの連携など。
- ⑤ 私たちは素人です。素人が少し手足と頭を動かしてみると、けっこう新鮮なものが見えてきました。知り合いになった熱帯諸国の団体の人達も、国内の専門家の人達も素晴らしい反面、意外としょ〜もない面があります。もちろん一番しょ〜もないのは私達です。でも上手く力を

▼ '96年コスタリカ「子どもの永遠の森」入口で

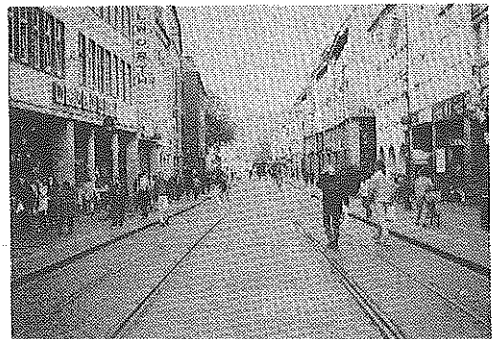


を合わせれば、良い方向に進むかも知れません。素人も捨てたもんじゃありません。(鶴岡政明)

① 地球の友金沢 / 代表・三国千秋 ☎076-258-2464 金沢市湖陽2丁目64

- ② 全国熱帯林雨会議で。その後サラワク・スタディツアーなどの情報提供や関西の熱帯林グループの取組み紹介などで
- ③ 小人数ですが、個々人の活動は多彩です。熱帯雨林の他にも、97年のドイツ・フライブルク訪問やCOP3以降、地球温暖化や環境教育、行政への政策提言、NPOネットワーク作りなどに力を入れています。
- ④ 1) 熱帯雨林への理解、破壊の現状を知らせる啓蒙活動
- 2) 国内の林業関係者との連携や日本の森や林業の現状を知らす教材ビデオ制作
- 3) 地方レベルの政府や自治体に対する働きかけ、政策提言など参加型の活動
- 4) 他の環境グループやNPOとの地方レベルでのネットワーク作り
- 5) 海外スタディツアーは今後も続けていきたいです。

▼ ドイツ・フライブルグ市



⑤ 今後も、関西の熱帯雨林保護や環境グループの拠点としての役割を長く続けて行ってほしいです。

●10月25日◎ 講演◆「アマゾンには森がない」

【『人無き土地に、土地無き人を』開発政策】

私は長年海外ブラジルへ行き、昨年の3月に帰ってきました。南米の半分はブラジル。

ブラジルのアマゾン、大きく見て二つに分けられます。一つは伝統的な河沿いの所です。河があれば水がひいたら、米、マンジョーカ芋等が取れる。そこにもともと人々が住んでいた。先住民のインディオです。

ポルトガルの植民地時代に、北東部の森林180万km²を焼き、砂糖を作り、だめになって次はコーヒーを。森は3%ほどになった。ブラジルの歴史は土地の分配制度にも由来する。最初は国王の土地だった。350年ほど前に、気に入る者に国王は土地を与えた。これが私有地の始まり。

そして1960年代に大きく変わった。軍党政権になった。国境を接する国も同じで、ブラジルは攻めこまれないように、どんどん道路建設を行った。大々的なアマゾン開発。

『人無き土地に、土地無き人を』という政策のもとに、道路建設、入植事業を進める。

「人無き土地」とは嘘で、そこに先住民がいたのです。大土地所有制度を残したまま、リオ・デジャネイロ、サン・パウロなどに集まった「土地無し民は、アマゾンに送りこめ」となった。

まず、道路建設。代表例がBR364号線、アマゾン横断道路。アマゾンはどでかい盆地でもあり、見渡す限りが森だ。BR364はサンパウロ、クイアバ、ロンドニアに通じる150kmの長大な道路です。85年に建設が終わったんですが、そこからまだペルー国境の急峻な山岳地の道路を建設し、木材等を太平洋側に運びだそうという計画でした。

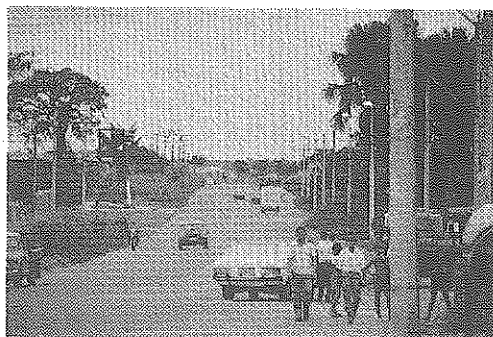
次に計画されたのはダムです。バルビナ、ツクルイ・ダムなど。国家規模の道路、ダム

◎原後雄太はらごゆうた (日本ブラジルネットワーク代表)

1958年東京生まれ。東大卒業後、某証券のアナリスト、世界自然保護基金(WWF)インターナショナル熱帯林保護担当官などを経て、93年に日本・ブラジルネットワークを設立。アマゾン、ボリビア等で自然農業などの社会開発、先住民支援事業を実施。



造りという土建国家的思想で開発が進んだ。結果1400億ドルの債務となり、IMF(国際通貨基金)が300億ドルもかましようという現状です。「道行くところ、森は無し」です。



▲ブラジルR364号線(ポルトベリヨ付近)

【森は醜いもの！ 牧場開発は次々森を壊す】

ボリビアに接した私が住んでいたロンドニア州は、20年間で荒れ果ててしまった。

ブラジル政府らの考えは、「森は醜く、野蛮であり、取り去るべき」であると。西欧世界の感覚です。そして、そこに牛や羊を飼うべきという価値観です。「森を残すなら、そこに住むなら、野蛮人である」と。インディオがそうだというものです。そして、ゴムを採取するために森に入り住むシリンゲイロたちも野蛮だと。1992年のサミットの時も伐採が続いた。

毎年8月ころになると、森に火が入れられ空が見えなくなる。この世の終わりの状態。この影響か、温暖化現象がアマゾンでも続く。

森林開発で、牧場はほとんど荒れ地になった。牛は400kgほどで、歩くと土が踏み固められる。アマゾンの雨はすさまじく、晴れると土地はカチカチになる。森には戻らない。農地であれば5年ぐらいで戻るが、牧場は1haに牛1頭ぐらいしかおらず、新しい牧草が必要で森を壊す。採算が取れなければ放棄し、他の地域へ行く。そして熱帯土壌に詳しくない人々も入植し、荒れ地が拡大した。

牧場をやめ、農地にすべきだ。それもトラクターで土地をひっくり返さないことだ。微生物を残し、多種の樹木を植えることだ。

ブラジルは90年に12%も森がなくなった(アマゾンは世界の熱帯林の約1/3)。現状は14%ほどか。パッチ状になり、森の多様性が失われていく。3600万haの半分が荒れ地となった。アマゾン開発は、税金の免除等で大土地所有者を有利にしたのである。

このままでは牛もいなくなる。牧場、伐採、農地転換は不可分で、非常に繋がりが深い。全部皆伐して牧場になる。抜き切りでもダメージが4割以上になり、とどのつまり、全部切っちゃう。持続可能社会への森林管理計画の法制度ができたのが94年。森は管理する対象にすら考えていなかった。だが、森林保護に対する弾圧は今も続いており、ブラジルの仲間は国外脱出を計ったくらいだ。



▲ ロンドニア州の牧場

【百姓は樹を植えろ、森を使うなら森を守れ】

次は、アマゾン川河口のベレンより200km行ったトメヤス市の話。そこは日本から移住した人たちの入植地です。

日系ブラジル人は、こっそりとシンガポールからコショウの苗20本をアマゾンに持ち返ったのです。ブラジルからゴムをアジアへ持っていった逆のことです。どんどんコショウを植えた。実がなったところにコショウの値がどんどん上がった。8年周期のコショウを植えまくった。儲かってコショウ御殿も次々できた。コショウの黒いダイヤに眼が眩んだのです。

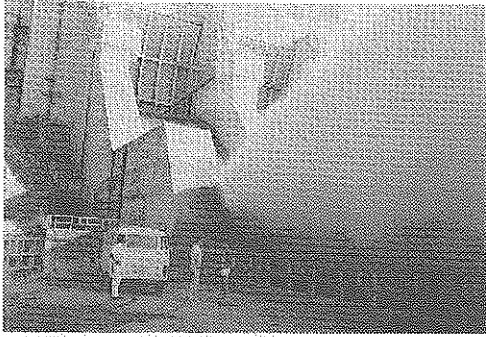
コショウばかりにしたものだから、表土はつるつるになった。1974年頃、コショウは全滅。トメヤスの人は半分いなくなった。「これではダメ」と樹を植え、森を作った。

まずカカオ。この葉は大きく、葉が落ちると腐葉土になる。カカオはジュースにもなり、

1991年までの法定アマゾンにおける森林伐採率

州名	森林伐採率(%)
マラニョン	65.8
トカンチンス	39.7
アマパ	1.5
パラ	13.0
マトグロッセ	16.4
ロライマ	2.6
アマゾナス	1.6
ロンドニア	16.1
アクレ	7.0
全法定アマゾン	10.5

出所：Fearnside, 1993より筆者作成。



▲ツクリイダム

チョコレートの原料にもなる。これに似たのが、クプアスです。アイスクリームにもなる。

カカオなどを植え、畑は森のようになった。パリュウカという早生樹は2年で大きくなる。その陽樹の下にマホガニー、カカオなど樹木作物、混合の果樹を植えた。樹を植えたから土も作れたんだ。

一斉造林はダメだ。特定の虫にやられる。森に多様性があれば、いろんな虫、蝶がくる。もともと農地は復元しやすいので、森になった。森を作ることで、生きぬけた。

「百姓やるなら、樹を植えろ」ということだ。百姓やるなら、子や孫の世代まで考える。それが百姓ではないか。例えば、ブラジル・ナッツとゴムが19世紀から20世紀のブラジルを支えてきた。また今ブラジルでは、アマゾンの魔法の薬といわれるアンジローバが注目を浴びている。

森の生産性を高めるのは森と共に生きること。インディオもそうです。しかし、多くのブラジル人、特に金持ちはアマゾンでふかふかの絨毯をひいちゃつて、クーラーもガンガンかける。アマゾンの特殊性を無視している。まるでヨーロッパの端に住んでいる気なのだ。

森を残すほうが経済的だ。森を活かす人は、地道に生き、森のものを商品化し、マネジメントする。森を使いたければ、森を守りなさいということだ。

【地域で取れるものを利用する】

ヤシは200種ほどある。プルーニャ・ヤシは酸味がある。アサイヤ・ヤシ、ココヤシなどもある。

ベレンの町からマラジョ島に行く。島は九州ぐらいの大きさで、中州にプライア・プランチという村がある。ここでは、森を活かしながら、住んでいる人がいる。

ココヤシを簡易な裁断機で切り、皮を乾かす。釜に入れて、繊維を軟らかくする。枠の中にココナツの皮をつけ込む。次に糊をつける。この糊はラテックスです。地域で取れる資源を活用している。ここがポイントです。

そしてできたのが、自動車のシートの後のヘッド・レストになるんです。ここで作ったものをメルセデス・ベンツ社が買う。ベンツ社は月に2500台の車を造っている。これで村人の収入が以前の3倍になった。

これは石油製品のウレタンより水の吸収性が良い。そして原料価格が安い。そして問題はごみ。ウレタンは燃やすといいですね。環境ホルモンになる(笑)。ココナツの繊維はもう一度使える材料となる。ごみになかなかならない。

ベンツ社は、2000年までに内装材をほぼ100%天然素材にしようとしている。世界で欧州は環境規制が厳しいという条件もある。ライフ・サイクル・アセスメントの素材のほうがかえって安上がりにもなる。そしてベンツ社はアマゾンの人々と提携した。

プライヤ・グランディにおける農業生産 (1990)
(ミチェイン他, 1994)

作物名	耕地面積 (ha)	生産量	生産額 (U.S.\$)
米	8.0	240 (50kgの袋)	1,035.53
トウモロコシ	5.0	50 (60kgの袋)	217.46
豆	8.0	107 (60kgの袋)	1,630.12
マンジョーカ	4.0	48 (トン)	1,844.81
ココ	25.0	40,000 (実の数)	2,815.50
アサイ	23.0	41,400 (リットル)	13,893.32
合計			21,436.32

出所: Mitschein ed., 1994.

1988年までに消滅した森林面積

単位: km²

ブラジルの州名	もとの面積			消滅した面積			消滅率 (%)
	森林	サバンナ	計	森林	サバンナ	計	
アクレ州	152,589	0	152,589	0,634	0	6,634	5.7
アマバ州	99,525	42,834	142,359	834	363	1,206	0.9
アマソナス州	1,562,486	5,465	1,567,951	12,635	45	12,680	0.8
マラニョン州	139,215	121,017	260,232	23,771	20,664	44,435	17.1
マツグロソ州	572,669	308,332	881,001	98,651	53,115	151,766	17.2
パラ州	1,180,004	66,829	1,246,833	140,172	7,939	148,111	11.9
ロンドニア州	215,259	27,785	243,044	36,774	4,747	41,521	17.1
ロライマ州	173,282	51,735	225,017	2,745	820	3,565	1.6
トカンティン/ゴヤス州	32,056	237,855	269,911	20,279	150,470	170,749	63.3
アマゾン全州	4,127,087	861,852	4,988,939	344,706	298,163	642,869	11.7
全州における割合	82.7%	17.3%	100%	59.1%	40.9%	100%	
消失面積/もとの面積				8.4%	27.6%	11.7%	

国立アマゾン研究所 P. M. Fearnside 氏提供

「地域で取れるものを活かす」ことが大事。このプライア・グランチでの始まりは、カトリック教会が大地主から土地を買上げたことから。ココヤシを植えまくった。カトリックの人たちは化学肥料をどんどん入れ、トラクターを導入した。

初めの頃はバンバン採れた。ところがですよ、それから3年ほどたって、ココヤシが全然採れなくなりました。1/4しか採れなくなったら、どうなりますか。やっと村人たちは立ちあがった。カトリックに背くことは、神に背くようなことではなかなかわづかしいことだ。だが、村人は生活が成り立たないから、やり方を変えたのだ。



▲元氣いっぱい講演。原後石松さん

【おためごかしでなく、本気で取り組む】

そのうち、訪れたのがベンツ社でした。農作物のひとつとして、ココヤシを買おうということになった。ベンツ社も環境保全を打ち出せ、村人の収入が大幅アップした。村人は、それからココヤシの単一栽培だけでなく、いろんな果実、樹木を植えていった。

ココヤシは、その他の開発プロジェクトに役立つことがわかってきた。例えば、途上国の8割の水が問題になっている。ここでも、ココヤシを使って水を濾過する。安全な水を供給するために、地元の大学の研究者や企業が現地調査し、研究している。

社会調査だけではダメ。現地へ行って何を実行するかだ。三菱商事は、東南アジアで熱帯林の再生をPRしているが、アマゾンでは事業をしているが、株を売ってしまった。やる気がなかったのだ。

おためごかしでなく、本気でやる気があるかだ。ベンツ社のようにやる気の問題だ。企業がダメかという時代でない。地元住民—先進国—大学研究者—企業がタイアップし、具体的なプロジェクトにできるかが問われている。企業とも対話の時代になってきている。森を造ることで、人々が生き抜くものになったことを知るべきであろう。

第2回：森林・幻の吸収源のその後

小倉 正(熱帯林行動ネットワーク)

●「抜け穴」つぶしは何のため?

私たちが目指す地球温暖化対策を進める上では、化石燃料起源のCO₂排出量を削減すること、それが可能になるように社会を変革する道を探ることが重要であり、京都議定書の数値のパーセント解釈をするのは本来、枝葉の議論にすぎないはず。しかし本来の削減対策の必要性を訴え続けるためには、まずは京都議定書の抜け穴を一つづつつぶしていかなければなりません。

特に対策の大きな抜け穴となりそうなのが、森林吸収源と代替フロン類などの新規3種ガスの二つの分野です。ここでは森林吸収源について特に解説します。

●吸収の意味

木が何も食べないのに成長できるのはなぜでしょう。それは光合成によって、水と大気中のCO₂から、樹木の大部分を構成するセルロースやリグニンを自分で作れるからです。木の幹のセルロースなどの重量の約半分が、固定化されたCO₂なのです。また、根の部分、枝葉が落ちて堆積したものや、切り株や分解途中の有機物なども、別途土壌中に蓄えられている炭素分であると考えられます。

●その場しのぎで使われた森林吸収源

京都議定書3条3項では、新たな植林によるCO₂の吸収分を勘定する「二重限定ネット方式」がとられることになりました。計算方法を図1に示してありますが、このやり方ですと、日本の森林は1990年の温室効果ガス排出量の0.3%を吸収する、という結果になります。そこで日本政府は京都会議では否定された「グロスネット方式」を復活させ、図2のように森林吸収分を3.7%までカウントできるようにしようとしています。



森林源の問題点を説明する小倉さん
(連続公開セミナー第2回)
1998.7.21 ウィングス京都にて

ところが環境庁のワーキンググループ資料「温室効果ガスの吸収源問題について」にもあるように、「グロスネット方式」で勘定すると、アメリカやカナダ、ロシアなど他の多くの先進国では、吸収量が排出量の数十%ないし数百%もの大きさとなり、それだけで京都議定書の目標数値を達成できることになってしまいます。

つまり日本政府がこの方式を復活するよう主張し続けることは、京都議定書の目標数値を役立たずにしようとするものであり、COP3の議長国として、また自国の地名のつく議定書を作った国として恥ずかしいかぎりです。京都会議以前の日本政府は、

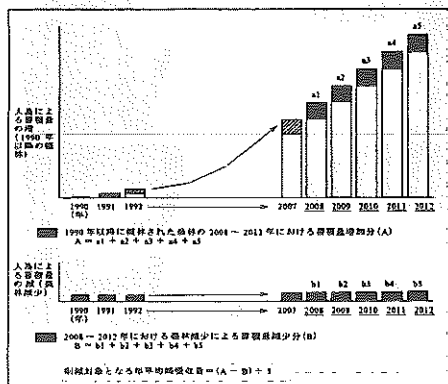
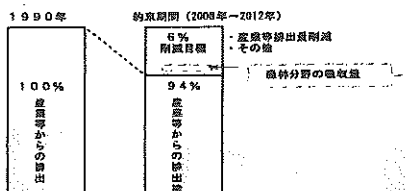


図1 温室効果ガス削減数値並びに森林吸収量の扱い

森林吸収源は科学的な確実性が低いとして議定書に組み入れることに反対し、他国のNGOからも評価・支持されていただけに、残念なことです。

しかしそれ以前に、3.7%という数字を出した過去のIPCCの算定方式には、伐採後の木材が林産物として扱われることが算入されていないという問題点があります。そこで現在、大気フロー法、炭素蓄積法、プロダクション法という3種の算定方式が提案・検討され、政治的な激しい議論となっています。これらの方式で、特に違ってくるのが、貿易される木材の取り扱いです。

熱帯林行動ネットワーク(JATAN)では、6月のボン会合の際、「木材貿易：日本にとってのもう一つの抜け穴か？」を配布し、日本の木材輸入をきちんと評価すれば、他国での日本向けの森林伐採が6%以上の排出側で勘定されるので、3.7%分の吸収源はそもそも成り立たないはず、という批判をしました。

実際、林野庁の交渉担当者自身、大気フロー法で算定した場合には、1990年における日本のLUCF(土地利用変化と林業部門)はCO₂の排出側となっているため、日本は京都議定書3条7項の適用を受けるべき国となることをこっそり認めています。また森林総研の研究者もこの算定方式のもとでは3条7項の適用が必要となると明記しています(「環境と公害」誌98年7月号・天野正博氏「COP3における森林を用いた温暖化対策」)。

3条7項では、LUCFの中で「林業」以外についての土地利用の変化だけが、ネット・ネット方式で算定することが認められています。したがって政府が、経済益を重んじ、吸収源を最大限に利用する立場を最優先するのであれば、3条7項の

●3条7項とは
一般に基準年(1990年)の排出量の計算では、「土地利用変化及び林業からの人為的排出量」と「吸収源からの吸収量」は考慮しない。
しかし1990年の「土地利用変化及び林業」が温室効果ガスの純発生源となる国については、「土地利用変化からの人為的排出量」から「吸収源による吸収量」を差し引いた量を基準年の排出量に加算することを認めている。

対象活動に「林業」を含むよう交渉することに努力を集中すべきです。しかし実際は「当面の取り組み」の権威を崩さないことの方を優先して、何の裏付けもない0.3%や3.7%という数字に政府は固執しているのです。

●もう一つの抜け穴—海外植林の算入

排出権取引や共同実施などの国際制度により海外から得る排出量は90年の1.8%分と政府は考えています。その中では海外での植林による対策は安いコストで実施が可能とされ、かなりの森林吸収量が見込まれているはずですが、ところが主にこれまで製紙業界が行ってきた海外植林が、その対象になるか、については疑問があります。それは、紙パルプが日本へ輸出されているので、貿易について状況が変わると、植林の取り扱いも変わるだろうし、またマレーシア、インドネシアなどで、先進国向けの油ヤシプランテーションの拡大のため森林に対して行われている火入れ等が、森林減少につながっているからです。

さらに現地社会に与える社会的悪影響も無視はできません。炭素吸収植林として、日本のニーズを満たすために途上国の広い土地を囲いこむことは、そのままでは南北問題を拡大再生産するものであることを忘れてはならないのです。

〈連載〉

真・日本林業論

—日本と世界の森林を守るために—

徳島県熱帯林問題研究会

猪俣栄一

第3回 森林の種類と景観について

1. 森造りの参加について

前回にも書きましたように、この連載の目的は、日本の林業や、林業の対象となっている商業林を守っていくことが、水資源を始めとするいろんな恩恵を我々に与えてくれる「森林そのもの」を守ることになるのだろうかということを考えることにあります。

今日、国民の間で森林に関する関心が高まってきています。そのあらわれとして、里山の復権運動や、ボランティアによる植樹や小規模な植林や、小グループで参加する枝打ちや下刈り等の林業体験や、流域協議会と称するものへの参加という名目で、下流の都市部住民が上流の林業地帯へ労力や資金を提供する運動等が盛んになり始めています。

そういう傾向が、森林保護にとって好ましいことかどうかという検討は暫く措くとして、林業者以外の人達——主に都市住民がそういう方向に動き出した動機というのは、一体何だったのでしょうか。

おそらく、衰退しつつある林業に、何らかの手助けをし、苦しい林業家達に少しでも援助をしてやろうということではなかったろうと思います。そうではなくて、暑いさなかに下刈りや枝打ちといった苦しい勤労奉仕に行ったりすることで、

自分達の飲み水や生活用水をはじめ、いろんな恩恵を与えてくれる森林に対して、少しでも恩返しをすることができたら良いなという、純粋な感覚から生まれてきているのだらうと思います。

そしてそういう感覚が、神奈川県で行われているような、自分達の水道水資源を確保するために、上流の林地を買い取って、水源林として残していく運動とか、いくつかの地方で行われているような、水源地帯に植樹しようという行動へと広がって行くのです。

つまり、経営の苦しい林業家を応援するためではなく、前号で述べた「森林の公益的機能」と呼ばれるものに対して、応分の負担をしようという考えなのでしょう。

そうしてみると、広い意味での森造りへの市民参加というものが、どういう形で行われるべきだろうかということの検討は、主として都市部の住民達が漠然と考えている「公益的機能」——森林による恩恵が、どういうタイプの森林によってもたらされているものなのかを、ジックリ考えてみるところから始まると思います。

そうする事によって、皆さんが労力や

お金を出して応援しようという「森造り」が、どんな森を対象にするべきかということが判る筈です。

では、どういう森林がどういう機能を持ち、どういう恩恵を私達に与えてくれるのかということを考えてみましょう。

2. 森林のイメージ

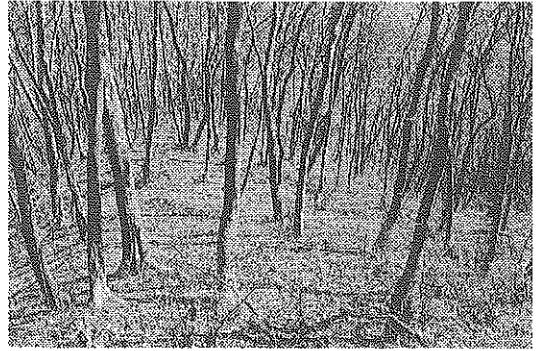
ひとくちに森林と言っても、随分いろんなタイプの森があります。樹高50メートルを越すような熱帯の多雨林もあれば、南アフリカのサバンナ地帯に見られるマメ科やバラ科の背の低いトゲ植物がまばらにはえているような貧相な森もあります。

春は滴るような新緑、夏は深い緑、秋は燃えるような紅葉と、四季それぞれの景観の美しさを見せてくれるブナやモミジ等の広葉樹林もあれば、一年中が暗緑色の静まりかえったスギ、ヒノキ等の人工針葉樹林もあります。

そういう多様な森林がある中で、私達日本人が、「森林」という言葉を耳にして、頭の中に思い浮かべる森林のイメージとはどんなものなのでしょう。

昭和59年に行われた林野庁の国勢モニター調査によりますと、国民の89%が、「森林」と聞いた時、春は新芽の緑が輝き、夏は深緑に溢れ、秋は目がさめるような紅葉となり、冬は枯枝にカラスが鳴くもの悲しい枯山を頭の中に描いていることが判りました。

つまり、古今集以来、あらゆる日本の詩歌管絃、絵画物語の世界で描かれた四季の変化豊かな森こそが、日本人の心象の原風景だったのです。それこそは、ブナ林や、カエデ、コナラ等に象徴される落葉広葉樹林の姿に他なりません。



日本文化の底に流れる仏教思想によって培われた「うつろい」の世界や、室町の末期に起こった茶道や江戸期の芭蕉達によって強調された「わび」、「さび」の感性は、端的に言えば、ものが「うつろい」という、儂さの認識から生まれたと言えましょう。そしてその「うつろい」とか「はかなさ」という感性的なものを、最もビジュアルに捉えやすかったのが、四季折々に見る落葉広葉樹林の景観の移り変わりであったのだと思います。

それが今日の日本民族の心象風景の底に残っているからこそ、上記のようなアンケート結果になったのでしょう（註1）。

註1. ただし針葉樹でもマツに対する日本人の思い入れは別である。アカマツ、クロマツを問わず、詩歌や演劇等をみても特別の感情が見受けられる。並木といえ、マツかサクラに代表されている程である。

3. 森林の景観

前項で述べたように、どんな森林を好ましいと考えるかという判断の基準とか根拠は、大きな落差があるようです。

一般的には、その基準となるものは、その森林の果たす役割とか、公益的機能とかいう、知識から割り出したものでは

なく、若葉の緑、紅葉の赤や黄色といった、視覚的なイメージにもとづく場合が多いでしょう。

さらに、森林の中へ足を踏み入れた時の爽やかさとか、森林の香りとか、足の裏に伝わる柔らかな落葉の感触とか、つまりは感性的なもの、感覚的なものが主体であろうと思います。

実はこここのところが大切なのです。先程引用したモニター調査では、逆に「スギ林」と答えた人が8%程おりました。わたしの憶測ですが、この回答者は、何等かの形で林業に拘わっている人達ではなかったらうかと考えています。

試みに春の一日、近くの山に登ってみましょう。一番理想的なのは、小さな溪流や谷川をはさんで、向こう側は新緑に溢れた雑木林、こちら側は鬱蒼と茂ったスギの造林地という所ならば申し分ありません。その、スギ林の林縁に近いところにそっと腰を下ろして、暫く座ってみて下さい。今まで歩いて来て汗ばんでいたのが、嘘のようにヒンヤリとして寒い程です。それは厚く茂るスギの葉に遮られて、林の中に太陽の光が差し込まないからです。

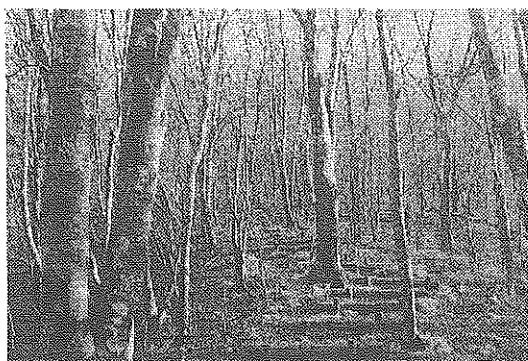
スギ林の中は森閑として何の物音もしません。ただ、暗い風が通り抜けて行くだけの半分死んだような世界です。

だが、溪流の向こう側はどうでしょう。風にそよぐ新緑に太陽の光がサンサンと降り注ぐ光の世界です。我が世の春を謳歌するウグイスの声があちこちで聞こえます。シジュウガラ、ヤマガラ等のカラ類や、時にはオオルリの澄んだ声も聞こえます。

小鳥達も巣作りするものもいれば、早くも子育てに入ってセッセと餌を運ぶ親鳥もみられます。気の早いアゲハやカナ

ブンやテントウムシが飛び交い、林床には多数のスミレやカタクリやニリンソウ等の春の花が咲き乱れ、トカゲが走り回り、まさに光と生命の溢れる世界です。

片や暗い半分死んだような林内景観、片や多様な生命に溢れた光輝く世界、これでは誰だってこの落葉広葉樹林の森林に軍配を上げたくくなります。ですから、先程引用したモニター調査の結果は妥当と言えましょう。



早春のブナ林（オオアカツバノミ、シコモヤコ、アケボノミ、アケボノミ）

4. 森林の経済性

こういう言い方には、林業家の多くの人から反論が出ることでしょう。その中で最も多いのは、多分「たしかに春の雑木林（林業家の人は、この漢字をゾウキバヤシとは読まずに、ザツボクリンと読みます。何か印象がよくないですね）は明るくて綺麗。しかしそういう雑木がどんな役に立つと言うのか。建築材にも家具材にもならず、炭やシイタケのホダギにさえならないものが多いではないか」というものでしょう。

確かにその通りです。雑木林は特殊なものを除けば、経済的価値は極めて低いものです。特に小さい若木の雑木林など、経済的には二束三文です（里に近くなる程樹齢の若い二次林で、森林としての価値は下がる）。

ですが此の論考は森林の価値を経済性

から見ようと言うのではありませんから、構わずこのまま話を進めましょう。

実話なのか寓話なのか真偽の程は判りませんが、戦前の小学校で教えられていたこんな話があります。ある大阪の木材商人が初めて伊勢神宮に参詣しました。内宮の拜殿の前に来ると、まわりは樹齢数百年のスギだかヒノキだかで取り囲まれています。あたりにいた参詣の人がその御神木を仰いで、「何と立派な御神木じゃ。有り難くて涙がこぼれそうじゃ」と言ったところ、その商人が「何と立派な古木やな。これを切り出して売ったら、さぞ高く売れることじゃろう」と言って、えらく叱られたという話です。

この話は、全体主義国家体制の下で、神国思想や精神主義を昂揚しようという本来の目的とは別に、人はそれぞれ、同じ物を見ても、立場や置かれた環境等によって、まるっきり価値観が異なるということ、よく言い表していると思います。

森林も同じことで、立場によって価値判断の基準が異なります。例えばブナ林がそのよい例です。日本が世界に誇る白神山地の広大なブナ林は、いまや世界自然遺産にまで指定され、守られていこうとしています。

しかしこの世界で最も広いブナ林も、ついこの間までは、大規模林道建設でズタズタにされる危機に立たされていました。しかもその計画の立案、実施者が何と国民のために森を守っていかねばならぬ立場の林野庁だったことは、皆さんもよく御存知でしょう。

どうして林野庁がそんな馬鹿げたことを考え出したのか。答えは簡単です。国有林経営の失敗で莫大な赤字を抱えた林野庁が、大規模林道建設という公共工事

によってひと息いれて、更にはその林道を利用して元手いらずのブナの大径木を切り出して、多少の赤字減らしに役立てようという、まことに近視眼的な立場で物事を考えていたからなのです。

この無謀な計画は、日本全国にとどまらず、世界中の自然を愛する人達の必死の努力で辛うじて食い止めることができましたが、この例は、先程の大阪商人と伊勢神宮の神木の話よりも、もっともつとケタはずれのバカげた話でありました。

5. 森造りの方向性

このように、森林景観のひとつをとってみても、随分いろんな問題があることにとまどいます。まして、これから話を進めて行く生態系としての森林の保全や、水資源と森林利用の問題や、生物資源としての森林利用というような問題になってくると、極めて厄介な意見の違いが出てきます。

一方、日本の林業は構造的な理由から不振を極めており、莫大な公共投資——林道建設や多数の補助金制度——によって、辛うじて辻褄を合わせているのが現況です。

そう言った窮状の中で、林業サイドの御都合主義的な言い分に惑わされることなく、森林の持つ本質的機能（生態系的機能）や公益的機能を維持していくためにはどのような森造りが必要なのか、そしてその目的に沿う、本当の意味での国民参加の森造りとはどんなことなのかということについて、次号以下で考えて行きたいと思います。

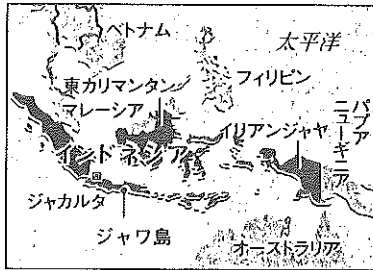
— つづく —

◀ 98年12月2日 ヤニヤイより

「シンガポール1日」

「湯浅博」一切の不正蓄財疑惑を否定してきたインドネシアのスハルト前大統領の一族が北海道の面積より広い熱帯雨林をひそかに所有していたことを、同国政府が突き止めた。と関係の一人が暴露した。不正蓄財追及の激化を予期してか、一族の弁護団は前大統領が法廷に立てば政府高官も訴訟に引きずり込まれ、「政府にとっても深刻な打撃となる」と反撃している。

熱帯雨林900万ヘクタール所有



スハルト前大統領一族

不正蓄財▶

これは、一日付同園英字紙ジャカルタ・ポストがムスリミン・ナスティオン林業相の発言として報じた。それによると、スハルト一族は九百万ヘクタールの森林を保有しており、ムスリミン林業相は、「これらの森林がスハルト一族とその縁故者の所有物であることを突き止めた」と語った。

これら森林は、イリアンジャヤ、東カリマンタンなどに広がり、スハルト一族がさまざまな木材社の名義を使って所有しているという。ムスリミン林業相はさらに、「スハルト一族が別の関係者に転売しているものもある」としており、同国当局は今判明した有地以外にも隠し持つて

いるとみて、さらに洗い出しを急いでいる。スハルト前大統領はこれまで、在任中の不正蓄財を全面的に否定し、捜査当局の事情聴取にも積極的に応じている。さらに、海外預金が判明した場合、「政府が没収できるよう委任状を渡す」とも述べており、その確約書をガリフ検事総長に手渡してもいた。しかし、米誌はスハルト氏の資産は四十億にのぼるとはじき出し、インドネ

シアの在野勢力はその数倍にもなると批判を強めていた。ムラディ法相は先に、捜査の結果次第では、「スハルト氏が投獄される可能性もある」と語り、とかく捜査に甘いと批判のあるハビビ政権の対応の正当性を強調している。だが、捜査は進展しておらず、在野勢力による徹底追及の声は日増しに高まっている。このため、ハビビ政権は、特別の捜査機関を設置する

方針を明らかにしている。こうしたハビビ政権による蓄財捜査に対し、スハルト一族の弁護団のヤコブ弁護士は十一月二十八日に、スハルト氏の二男が所有する民放テレビで、「スハルト氏が出廷することになれば、現職高官や元高官など不正蓄財を疑われている人々がこぞって訴訟に引きずり込まれる」と反論、「政府が弱体化する」と、捜査をけん制している。



インドネシアのジャカルタで9日、事情聴取を終え、何人ものボディガードに囲まれて検察庁舎を出るスハルト前大統領。ロイター

北海道より広い面積

森と人びとを飲み込むバクンダム

(サラワクキャンペーン委員会より)

かねてから問題となっていた、マレーシア・サラワク州でのダム建設（バクンダム）による先住民族の移住が、当事者の反対のある中、98年10月から開始されました。

このバクンダムは、シンガポールの面積以上という広い土地（69000ヘクタール）を水没させる予定で、その地域に住んでいる約1万人、15の村の先住民族の人びとが立ち退きに直面しています。

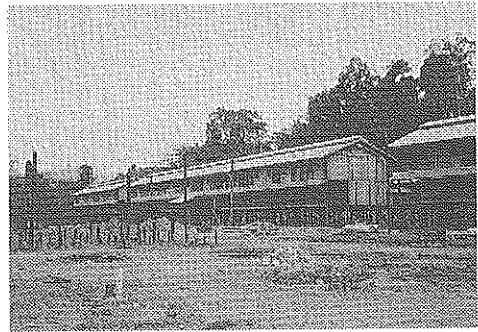
97年、「バクンダムの建設は無期限に延期した」とマレーシア政府は発表しました。しかし、計画の見通しがはっきりしていないにもかかわらず、住民の移住は予定通り実施されています。

10月1日に開かれた住民の会議では11村からの参加があり、「住民たちは今の土地に残り、最後までたたかい続ける」という強い意思が表明されました。

住民が移住に反対する理由はいくつかあります。移住先ではその住居に対して一部屋あたり5万リンギ（約170万円）ものお金を払わなければなりません。さらに、移住先で与えられる土地も、農作物を育てるには不十分です。その上、移住先の物価はそれまでの場所よりも高いのです。

支払われるはずの補償金も、30%程度が支払われたのみで、残りの70%は移住後に支払われるとされています。サラワク行政官のY氏は「住民が移住を拒否するのであれば、残りの補償金は支払われない」と言っています。

11月23日までに、4つの村、3千人もの



バクン移住民の
新ロングハウス

人びとが移住させられてしまいました。既に移住をしたロング・アヤ村の人々は、元の土地に戻りたいと考えています。しかし、この住民たちが元の土地に戻ることは不可能に近い状況です。

さて、この状況に対して、今後様子を見ながら、マレーシア政府宛にこの強制移住政策を見直すよう要請する、手紙書きなどのキャンペーンを考えています。危機にある住民たちを支持する声を、マレーシア政府へと届けましょう。

タイミングを見て、ウータンから皆さんのお手元にキャンペーン用のグッズをお送りします。その時にはぜひとも強力なご協力をお願いします。

(最新ニュース問い合わせ先)

・サラワクキャンペーン委員会：☎03-3954-3510

(E-mail: scc@vcom.or.jp)

・尚、大阪ではウータンの篠宮（☎/fax 06-354-8489山猫通信社気付）が一応の窓口になっています。

今年一年、ウータンの活動を応援していただいて、ありがとうございました。

『熱帯林週間』のシンポジウムに賛同金をくださった方や、美しい切手を沢山送っていただいた方など、皆さんのおかげで、今年も活動できました。

不況にもかかわらず、日本の二酸化炭素は増え続けているとのこと。温暖化を防ぐためにも、森は大切です。引き続き、熱い思いのウータンをごひいきに！

【98年度会計報告および新年度会費納入のおねがい】

おかげさまで、繰り越しは少しふえました。しかし、来年はパプアニューギニアからのゲスト来日も予定されています。なにかとお金のでていく時期ではありますが、99年の会費をよろしく願いたします。（同封の振込用紙をご利用ください。おそれいりますが、「会費」「カンパ」「資料代」などのうちわけを通信欄にお書きください）

〔収入〕

くりこし	140,187
会費	411,000
学習会参加費	7,200
カンパ	244,075
講師謝礼	77,820
物品販売・パネル貸料など	65,380

合計 945,662円

〔支出〕

会報・チラシ等製作費	229,344
送料	224,685
家賃	144,000
学習会謝礼	40,000
賛同金（『熱帯林週間』イベント）	5,000
会場費	15,480
雑費	9,345
くりこし	277,808

合計 945,662円

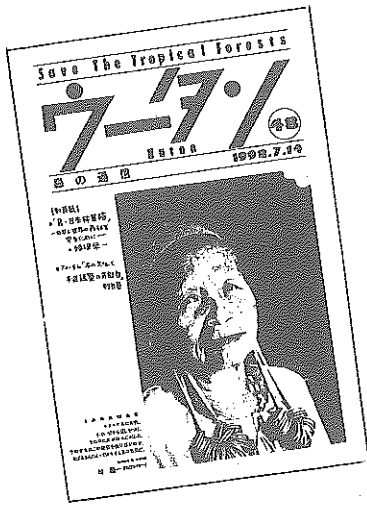
『ブナン基金』よりサラワク先住民裁判支援金10,000円支出（別会計）
（サラワクキャンペーンへ）

〔おたより〕

ナマステ。年会費振り込みます。49号「国産材で家を建てたぞォー」の米澤さん、家が出来あがるまでのワイワイ、ドキドキが伝わってきました。私もいつか、セカンドハウスを国産材で！！
門真市 松本剛一

〔熱帯林週間イベントに賛同金をいただいた方〕

グループ地球人（岡本昭子） 千代延明憲 PHD協会 本領宏子 米澤達夫



BACK NUMBER バックナンバー 索引 [195年～'98年]

- ◇ 温暖化問題 (COP3)
 - 12月7日 森林問題シンポジウム 46号
 - 環境NGO・これからの地球を守るもの
 - 猪俣栄一 46号
 - 変な植林はダメ! 48号
 - 「海外植林が一役??」 48号
- ◇ 紙
 - 日本製紙連合会への質問状 48号
 - 日本製紙連合会からの回答 49号

スタディー・ツアー

- ◇ サラワ 「あつい情けに泣けたゼサラワク」
 - ①② 荒木琢磨 46・47号
- ◇ パパ・ニューギニア
 - パプア・ニューギニアをたづねて 38・39号

◇ 日本林業

- 熱帯林連続講座「国産材」 44号
- 「真・日本林業論」猪俣栄一 48号
- 枝打族 (林業体験) 37・41号
- なんで熊本県産間伐材合板を作ったの
—中九州建設見学— 41号
- 山の森から「薪編」 徳島の山と川 47号
- 山からの傾り炭焼き百姓はおもろいな—
市井晴也 45-47号
- 山の傾り「熊野から…」 峠観 41-44号

- ◇ 住宅
 - 連続講座「住宅編」 39号
 - 「国産材で家を建てよう!」
*澤興治 49号
 - 関西熱帯木材使用削減委員会
38・42・43・45号

◇ 家具

- つくり手からの家具のお話 40号
- 家具 36-38号
- 家具アンケート結果報告 39・40号
- 「私がアンティーク家具に惹かれるわけ」 40号
- 熱帯林連続講座「家具編」 39号

◇ 震災と住宅&廃材

- 阪神大震災と木造住宅 (三瀬彰) 37号
- 震災廃材 36号
- 震災廃棄物置場見学 (山岡子) 37号
- 連続講座「廃材・ゴミ編」 40号
- 阪神淡路大震災と廃材問題 山本達士 36号
- 特集: 阪神大震災から 35号

◇ その他

- APECは環境を破壊する 38号

☞ 90円切手4枚を同封してご希望の号を事務所までお申込みください。

- 「熱帯林を考える」猪俣栄一 27-43号
- 持続可能な森林経営・国際会議
の問題点を探る 猪俣栄一 42号
- 熱帯林保護運動のゆくえ 大西裕子 43号
- 熱帯材削減自治体一覧表 41号
- 熱帯林保全全国市民会議 44・45号
- 熱帯林連続講座IIを終えて 表島きみこ・鈴木達子 36号

◇ 海外事情

- カナダ森林地帯と先住民の村を訪ねて
Jatan・黒田洋一 42-47号
- [熱帯林連続講座]
- フィリピン編 「破壊と造林計画」 36号
- ソロモン編・インドシナ編 35号
- アマゾン
- SOS!アマゾン熱帯林から 38号
- 「アマゾンの森燃ゆ」 47号
- ◇ インドネシア 熱帯林連続講座inとよなか 42号
- 「インドネシア森林火災—オイル
パームの功罪」 川上園子 46号
- ◇ サラワ 熱帯林と日本 36号
- ヤシは地球にやさしいか?
峠隆一 42号
- 熱帯林連続講座 44号
- 緊急行動!先住民への相談人権侵害 45号
- 「サラワク先住民裁判」 46号
- 「私たちが今日何を食べている?」 47号
- 「サラワク森林火災」 47号
- 「道は何をもたらしたか?」 49号
- ◇ パパ・ニューギニア
- 熱帯林連続講座 (ベノカノ) 35号
- パプア「丸太輸出やめる?」 37号
- 「森を守る人たち」ゲスト報告 39号
- 緊急救援キャンペーン 46号
- 「森を守り続ける村人たちの智慧」 松本浩一 49号

- ◇ ロシア 「狙われる北の森・ロシア」 41号
- 連続講座「シベリア材」 44号
- 「マルシェ RH社ロシアでも伐採」 46号
- 「後遺症」に苦しむ凍土」 49号

HUTAN ACTION SCHEDULE

99年度ウータン総会



【ゲスト】 三国千秋 (地球の保金沢・ミクニ4アキ 北陸大学教授)

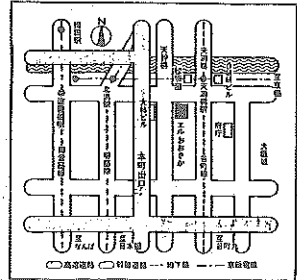
・講演: 「ドイツの環境政策」

— ドイツ・フライブルグ市, CO₂削減や森林問題 —

・総会では'99年ウータン活動方針やアクションの検討をします
ので 会員の皆さんの意見を お聞かせ下さい! タインマス……。

【とき】 1月24日(日) 午後1:30~4:30まで

【場】 エル・おおさか (府立労働会館 Tel. 06-6942-0001)
地下鉄・京阪 天満橋下車 徒歩200m



☆ マルティン・ポツカウ神父 来日!

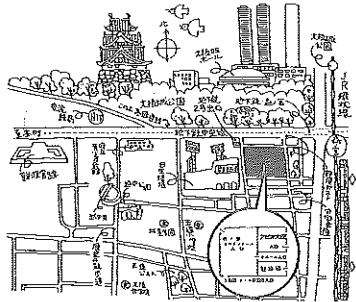
P.N.G.
「パイアニューキニアの
森林破壊と干ばつ」

【とき】 2月24日(水) 6:30pm~

【場】 アピオ大塚 地下鉄甲斐線, JR
「森ノ宮」下車 徒歩5分

【報告】 清水立苗子 (マルセス修道会・シスター)

救世プログラムの中核人物
という神父さん, 道路など開発
による森林破壊や干ばつの
調査を行なっておられる。



【TEL:06】0722-52-0505 (夜間) 田岡良夫まで



ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】 〒530 大阪市北区中崎西1-6-36
サクラビル新館308
「関西市民連合」気付
Tel.06-6372-1561

【一部】300円 | 【年会費】3000円

【郵便振替】00930-4-3880

◎購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。

◎ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。